空

2016・4・5

SORA 66号

空
平成28年5月10日発行
第14巻2号
通巻第66号

大八洲

柴田佐知子

春立つや幹を流るる山の雨

田を打てり球形の地を諾はず

諸神を収めて霞む大八洲

紐を得し子猫いよいよたかぶれり

もう腰の伸びざる母や八重桜

杖ついて母が隣家へ豆の花

紙風船もとの形に畳みけり

PDF= 俳誌の salon

春風やずらされてゐる境石

内海のぐつたりしたる虻の昼

荒々と返されし田に灘の風

黒潮を出て東京へ桜鯛

赤ん坊が胸に張りつく夕ざくら

春愁や纏うてゆるきものばかり

伝言のごとく落ちたる紅椿

能面の裏に桜の闇があり

隊商に加はり春の夢を行く

PDF= 俳誌の salon

福岡　高倉和子

ひと筋の風の強さや落し角

お玉杓子影より早く動きけり

最後まで不良と呼ばれ卒業す

材木を立てて乾かす柳の芽

遠足を追ひかけてゆく雲ひとつ

春焚火やがて一人が話し出す

老僧の読経遅るる花の昼

潮干狩大きな声で呼ばれけり

東京　中田みなみ

温室の春に咽びて咳こめり

バレンタインデー遺されて餡煮詰めをり

受話器手に野遊びの空約したり

雛の日や園児に昼の鳩時計

ジャンケンで触るる順番眠り草

ミモザ咲き黄昏長き硝子館

山宿の山見えぬ部屋四月馬鹿

摑みたる枝の弾めり遠雪崩

PDF= 俳誌の salon

長崎　荒井千佐代

磯菜摘む岬マリアの視野の中
裏口に舟の着きたる雛の家
蜑路地はかうもりの幅あたたかし
摘草の泥の手洗ふ聖午鐘
逢瀬なりユダの色なる山吹に
流し雛千体沈め海凪げり
春星の濃き日に死にき父ははも
ハライソは逃水の先駆けゆかむ

埼玉　服部早苗

霊長類ヒト科のわれら寒夕焼
しはぶきの雀色時帰りくる
忌日近し沈丁しかとふふみ初め
電球を振れば春立つ音かすか
陸封魚めきて余寒をさまよへる
強東風や透かしの入りし遊び紙
逃水を追ひ立てて来し四駆かな
囀やミルキーハット斜交ひに

PDF= 俳誌の salon

福岡　柴田志津子

駈けてきて礼者迎ふる座敷犬
初明り夫ありし日の床柱
如月や菓子より箱のうつくしき
泣いて来る子にぶらんこを譲りけり
鎌を日にかざしてゐたる農具市
山吹や子がていねいに挨拶す
辻棲のあはぬ話も春めけり
子が去りし部屋に風船ただよへり

福岡　岸　洋子

薄氷や生くるに何も憚らず
松よりも雪吊りの縄香を放つ
水準器手に雪吊りを取りしきる
湯の町の端より暮るる猫の恋
寒梅に佇ちて旧知のごとく居り
鬼やらひ子を待つほどのこともなし
むらさきに枝々潤み春立てり
山焼きの匂ひ残れる奈良暮色

PDF= 俳誌の salon

北九州　深川淑枝

松影を波洗ひゐる寒の入
底冷えや水掃き出しし糶のあと
依代の鏡海向く余寒かな
椿赤くてあやかしの憑きし船
桜貝置くや手のひら渚めく
舷に生簀をおろす朧かな
波音も風も暮れ来し牡丹の芽
海鳴りを曳く空揺るる初桜

兵庫　戸栗末廣

往来の声やり過ごす海鼠桶
きさらぎの雲の流るる競走馬
木の洞の闇大いなる追儺寺
鋭きこゑの鳥の過りし干鰈
農小屋の裏の白梅まつ盛り
春嵐ビル組む音を攫ひゆく
連凧の先頭海の上にあり
春は名のみ山へ轍のいくすぢも

PDF= 俳誌の salon

福岡　永淵惠子

白魚簗組みて山河の整ひぬ
菌打ちの音の響みて春動く
雛飾る朝な夕なに声かけて
閉ざされしままの生家や雲に鳥
生き死にの話も少し花の昼

糸島　小林朱夏

宿題は母の近くで燕来る
柿若葉土偶のごとく児は立てり
走り根の階なす山や時鳥
嘶けば卯波応ふる岬かな
つまづけばそこが遊び場天道虫

太宰府　山本則男

鵜殿磨崖佛

ゆく春や邪鬼の逃げたる多聞天
春光を光背として観世音
囀りや石の佛に石の耳
朧夜の岩に食ひ入る佛たち
待春のまなざし揃ふ磨崖仏

千葉　原友子

仁丹を秘めたる二重回しかな
父の忌に蒔き母の忌に引く大根
なりふりをかまはず蓮の枯れにけり
臘梅の何も求めぬやうに咲く
またの世は情死もよけれ葛湯吹く

PDF= 俳誌の salon

長崎　松尾龍之介

索引は聖書に発す寒すばる
厭離穢土欣求浄土の雪だるま
ひとり来て独り上手の尉鶲
さざなみの銀鱗うごく春の湖
鉄幹に晶子のやうな梅咲けり

粕屋　長憲一

すずなりの柿に晩鐘響きけり
田の神に田じまひの餅供へけり
その中に手こずりし子も卒業す
一日の暮れゆく障子染まりけり
冬の雲重なり合ひて流れゆく

福岡　山内碧

離れ住む子と大雪を案じ合ふ
雪女母の顔して近付きぬ
人気なき社に余る鏡餅
初戎革ジャンパーの僧に会ふ
道に人居ぬときに打つ鬼の豆

大阪　田岡千章

二日かなロボット掃除機ぶつかり来
小寒や瑪瑙びかりに松の脂
大層な煩ひもなし薺粥
交番や冷えまさりたる黒電話
ほんたうは出しやばりですねん青木の実

PDF= 俳誌の salon

粕屋　吉田　葎

冬萌や王の墳より鳥翔てり
古墳へと雀隠れの案内板
冬椿何でも揃ふ島の店
討入の日の熱々の番茶かな
海鳴りにまがふ念仏寒の入り

福岡　栗原　京子

漁終へし船迎へ入れ注連飾
片づけの氏子がひとり四日かな
帰りにはもたれ合ひたる雪だるま
豆撒きの一投に声湧きあがる
植木市鬼門封じの真つ赤な実

須恵　苑　実耶

手の届く限りで終へる大掃除
替へにけり予定で埋まる初暦
エプロンを外して入る初写真
歳順に並びたる子へお年玉
福耳をすつぽり隠す耳袋

宮崎　田代　民子

舟伏せて御開帳待つ舟大工
永き日の仏足石に鳥の糞
百度石廻らば亀の鳴くならむ
世を捨てしかに如月の太公望
夕映や太郎冠者てふ落椿

PDF= 俳誌の salon

新宮　井浦美佐子

涅槃会の散華一片しをりとし
寒紅や鏡にうつる古箪笥
草むらに上着を抛る畠打
梅林や稲荷鳥居の奥まりて
いつまでの母と子の卓黄水仙

東京　山田正子

落椿置き去りにして日の暮るる
明け方の夢は正夢竜の玉
はこべらやひよこピンクに染められし
逝きし子の遊ぼ遊ぼとかざぐるま
白鳥の薄ら汚れて帰りけり

福岡　あさながぢ

御開帳藍半纏の男衆
とつたんに潮汲み上ぐる花の島
ふらここや波は地球を縁取りて
忘るるを恐れぬ母やアマリリス
襞深き鰭をしげなく金魚かな

北九州　横田敬子

古家には神様多し年用意
もう誰も泊まらぬ蒲団干しにけり
風花の一番ホーム電車待つ
捨て野菜屑も混ぜ込み春田打つ
昨日来て今日も来る鳥春立ちぬ

PDF= 俳誌の salon

第五回「空賞」受賞

深川　淑枝

瀬のたびに水躍りけり雲の峰

堰に水折れてひかりぬ稲の花

簗掃いて落鮎を待つ朝の晴

年魚さはに獲れしと豊後風土記かた

鮎食ふや日の残りゐる磧の木

背越鮎噛むとき耳輪揺れにけり

水神へ空晴れて来し茄子の花

酢の香してゆふぐれ長き川床涼み

遠まきの山より暮れて川床料理

客を待つ船の奥まで西日差す

PDF= 俳誌の salon

涼み船舳先に大き星かかり

草に揚げ魚臭薄れし鵜飼舟

揚舟の淦にさざなみ夏の果

くたくたと魚籠の置かれて白木槿

どの家にも川へ出る階鳥渡る

みづうみの青き翳より秋の風

蛇入りし穴のつづきに王の墓

昼月は須恵器のかけら稲を干す

空の芯冷えて古墳に金の馬具

海人族の裔かも大豆引きゐるは

狐火の強く立ちたる古墳村

樗の実垂るる高さに水平線

晩稲刈り終へて俄に波の音

藁干すや湖に降りこむ空の青

行く秋の井戸ひびかする紺屋かな

うつばりにうねりの力いなつるび

土笛のわが息さびし木菟の声

自づから渚へ来たる秋思かな

青北風や腋暗かりし海の鳥

海砂を握るやふゆる鰯雲

PDF= 俳誌の salon